市長　慰霊のことば

世界中で多くの尊い人命が失われた第二次世界大戦の終戦の日から、75 年という歳月が流れました。
昨年は、台風の接近に伴い、開催を見送ったところでございますが、本年は、また例年のように、ここ探勝園において、第二次世界大戦戦亡者慰霊祭を執り行うにあたり、ご遺族をはじめ、関係の皆様方に、心から感謝申し上げますとともに、戦亡者の御霊に謹んで哀悼の誠を捧げます。

先の大戦においては、将来ある若者が、最愛の家族の幸せ、祖国の安寧を願いながら犠牲となり、また、各地における激しい空襲、そして、広島、長崎での原子爆弾の投下により、多くの尊い命が奪われ、国土は、まさに焦土と化しました。

私どもの郷土、鹿児島市も、度重なる空襲を受け、市街地のおよそ 9 割が焼失し、多くの市民の皆様がお亡くなりになるという、筆舌につくしがたい悲惨な体験をいたしました。
こうした想像を絶する状況の中、かけがえのない家族や友人を失った深い悲しみに耐え、幾多の苦難を乗り越えてこられたご遺族と関係の皆様に、改めて、深く敬意を表する次第であります。

戦後、わが国は、一貫して平和国家としての歩みを続け、世界に類を見ない経済発展を成し遂げ、国際社会において重要な役割を担うまでになりました。

本市におきましても、ご遺族をはじめ、市民の皆様方の弛まぬご努力により、見事に復興を遂げ、今では、60 万人もの市民が健やかに暮らし、豊かな自然と多様な都市機能が集積した中枢中核都市として、着実な発展を続ける中で、令和時代における持続的な成長と、さらなる飛躍に向けて挑戦を続けております。

一方、国際社会に目を向けますと、今なお、国家間や地域間の対立が繰り返され、大量破壊兵器の拡散やテロの脅威にさらされるなど、世界の恒久平和を実現することの困難さを痛感いたします。
また、現在、新型コロナウイルス感染症という新たな脅威に直面しており、この未曾有の危機を克服するため、しっかりとした国際協力と地球規模の連携が強く求められております。
私たちは、このような時だからこそ、改めて、目の前に立つこの「敵味方戦亡者慰霊碑」に込められた、「敵味方の区別なく、全ての方々を慰霊する」という崇高な精神に立ち返り、平和への強い思いを胸に、皆様と一緒に手を取り合い、歩んでいくとともに、ウイルスとの闘いを収束させる道筋を見つけてまいりたいと考えております。

平成 2 年の「平和都市宣言」から 30 年を迎えた本市におきましては、再び戦争による惨禍を繰り返さないことを誓い、核兵器の全面廃絶等を希求し、毎年、「鹿児島市の戦災と復興資料・写真展」や「原爆パネル展」を開催しているほか、市内の小学生・中学生から、平和に関する標語を募集し、多くの市民の皆様に平和のメッセージを発信しております。

戦後 75 年が経過し、我が国では、私自身も含め、戦後生まれの世代が人口の 8 割を超え、戦争の記憶が風化していくことが強く懸念されております。
私たちは、戦争という悲惨な歴史の教訓を深く胸に刻み、平和の尊さと、この慰霊碑に込められた思いを、しっかりと次の世代へ語り継いでいくとともに、世界の恒久平和の達成を願い、不断の努力を続けてまいりますことを、ここに固くお誓い申し上げます。

結びに、戦亡者の御霊のご冥福と、ご遺族の皆様方のご健勝とご多幸、鹿児島市の限りない発展を祈念いたしまして、慰霊のことばといたします。

令和 2 年 8 月 15 日　鹿児島市長　森　博幸

議長　慰霊のことば

本日ここに、ご遺族並びに関係の皆様ご参列のもと、第二次世界大戦戦亡者慰霊祭が厳かに執り行われるにあたり、鹿児島市議会を代表して、戦亡者の御霊に謹んで哀悼の誠を捧げます。

第二次世界大戦という、苛烈を極めた戦いの中で、戦禍の犠牲となり、数多くの尊い命と貴重な財産が失われました。終戦から長い歳月を経た今もなお、先人たちの犠牲の重さは、私たちの心の碑に強く刻み込まれております。

最愛の家族のため、また愛する祖国のために散って行かれた先人たちの命の重さを想うとき、万感胸に迫るものがあります。また同時に、幾多の苦難を乗り越えてこられたご遺族の皆様のご労苦に、深甚なる敬意を表する次第であります。

本日、我が国が終戦を迎えてから、75 年が経過いたします。現代を生きる私たちは、あの壮絶な戦争を様々な記録を通して知ることができますが、実際に起きた悲惨な歴史であるにも関わらず、ともすれば、単に歴史的事実としての理解だけに留まってしまいがちであります。

戦争を体験した世代が徐々に減ってきた現在、私たちが享受している平和と豊かさは、戦渦に倒れた多くの方々の尊い犠牲の上に築かれたものであることを改めて強く認識し、風化させることのないよう、世代を超えて語り継いでいく必要があります。

我が国は、戦後の復興から高度経済成長を経て、今日まで世界に誇る目覚ましい発展を遂げてまいりました。その間、時代は、戦争を経験した「昭和」から、戦争を経験しなかった「平成」、そして現在、新たな「令和」へと移り変わり、平和国家としての確かな歩みを進めてきております。

平和都市宣言から 30 年を迎えた鹿児島市もまた、南九州の中核都市として着実な発展を続けており、この平和で豊かな愛すべき郷土を、私たちの責任において、100 年、200 年先の未来へと確実に引き継いでいかなくてはなりません。

本日、終戦の日を迎えるにあたり、私たち一人ひとりが、戦争の悲惨さと平和の尊さを改めて深く見つめ、郷土鹿児島市の限りない発展はもとより、世界恒久平和の実現を目指して、これからも不断の努力を続けていくことを堅くお誓い申し上げます。

結びに、尊い命を捧げられました御霊の永久の安らぎと、ご遺族並びにご参列の皆様方のご健勝、ご多幸を心からお祈り申し上げまして、慰霊のことばといたします。

令和 2 年 8 月 15 日　鹿児島市議会議長　川越　桂路

児童代表　慰霊のことば

今、世界中で、新型コロナウイルスが猛威をふるい、大きな影響を与えています。私たちの小学校でも、感染拡大防止のために、昨年度末から 2 回の休校措置がありました。しかし、名山小学校には過去に長期の休校期間があったと校長先生にうかがいました。それは、昭和 20 年 6 月の鹿児島大空襲で名山小学校の校舎が全焼し、自然休校となってしまったからだそうです。また、鹿児島大空襲の資料を見せていただき、さらに驚きました。城山から見た市内の写真に写っていたのは、空襲でほとんどの建物が焼け落ち、跡形もなくなっている姿でした。私は、数週間休校だっただけでも不安で仕方なかったのに、当時の小学生たちの不安はどれだけ大きかったか、計り知れません。私は、毎日安全に学校に通い、多くのことを学び、周りに、笑顔の友達がいることがどれだけ幸せで有難いことかを感じました。

私は以前、知覧特攻平和会館を訪れたことがあります。出撃し、ボロボロに傷ついた本物の零戦は、戦闘の激しさや恐ろしさを静かに物語っていました。

そこに展示された多くの遺書には、信じられない内容が書かれていました。中でも、私が一番印象に残ったのは、夫に未練なく特攻してもらうために、二人の娘とともに川に身投げした妻の遺書と、それを受けて、夫である少佐が、先に旅立った娘たちに宛てた手紙です。現代の世の中では考えられないようなつらい手紙でした。私は、自ら命を絶つことへの戸惑いや、人の気持ちを追い込む「戦争」への恐ろしさを感じました。

その他に、鹿児島大空襲体験者の資料として「疎開先から久しぶりに実家へ帰ってきた姉親子を迎え、母が心づくしの夕食を囲み、楽しい時間を過ごした。しかし数時間足らずして、姉親子の無残な遺体を抱くことになった。」という体験談がありました。日常のささやかな幸せでさえ奪う戦争。様々な命を奪っていく戦争。なんて悲しいのでしょうか。

私は、人々が笑顔であふれ、幸せで満ち足りた世界であってほしいと願っています。そのためには、「あのような悲劇を決してくり返さず、二度と戦争をしてはならない。」と誓い、一人一人が平和について考え、幸せな未来を作る努力をしなければなりません。そして、その思いを次の世代に受け継いでいかなければなりません。その担い手に私はなりたいと思います。いえ、必ずなります。

最後に、戦争で亡くなられた方々のご冥福を心よりお祈りして、慰霊の言葉といたします。

令和 2 年 8 月 15 日　鹿児島市立名山小学校 6 年　多田　桃子

生徒代表　慰霊のことば

令和2年第二次世界大戦戦亡者慰霊祭の開催にあたり、慰霊のことばを申し上げます。

本日は8月15日。戦争の真実を改めて振り返り、平和の大切さを確認する日です。

学校で、1945年6月17日の鹿児島大空襲について学びました。突然鳴り響く空襲警報。ヒューヒュー音を立てて落とされる焼夷弾。辺り一面火の海。その中で、逃げ惑う人々。もがき苦しむ人々。ご自身もお姉さんを亡くされた女性の話にあった、孫の亡骸を抱いていたご近所のかたのお姿に、私は大きな衝撃を受けました。戦争は大好きな家族、家族との笑い合う日々を奪い去ると強く思いました。

特攻隊や沖縄戦、戦争のどの話を聞いても、怒りや悲しみ、苦しみ、悔しさで、胸がいっぱいになります。

平和を守り、戦争をしないために、中学生の私たちに何ができるのだろうか、考えました。

まず、一つ目、過去にどんなことがあったのかを正しく知る。

鹿児島大空襲の学習で、テレビの特集番組で体験者のお話しを聞きました。人は楽しかったことを話すのは、うれしいものです。しかし、恐ろしかったことや悲しかったことを思い出し、言葉にするのはどんなにか辛いでしょう。それでも語ってくださる気持ちに、若い私たちは応えなければなりません。教えてくださったことを自分なりに理解し、しっかり記憶にとどめます。また、自ら学ぶ姿勢も大切にしたいです。私は秋に修学旅行で長崎に行く予定ですが、原子爆弾の被害とともに、被爆者のみなさんがどんな思いで生き抜いてこられたのかも学習したいと思います。

そして、二つ目、知ったことを友達やこれからの人に伝える。

体験者から伺ったことや自分たちで調べて分かったことを、体験者のみなさんがそうしてくださったように、今度は私たちが伝えていきます。体験をしていない私たちが伝えるのには難しさがあるかもしれません。しかし、戦争が二度と起きないために伝えたいと立ち上がった方々の思いを、本気で受け継ごうという気持ちが私たちにあれば、きっとできるはずです。

三つ目、現在、世界で起こっているできごとに関心をもつ。

今、世界でそして国内で何が起きているのかを新聞やニュースで把握しましょう。世界の中には、紛争で命を奪われ、家族や暮らしを失い、国を追われている子どもたちや人々がたくさんいます。国内、国外で起きていることは決して私たちに無関係ではないと自覚することが必要ではないでしょうか。過去に照らし合わせながら、現在のできごとが、なぜ起きて、どんなことにつながっていくのかを考えることは、平和な未来につながると信じます。

2020年、新型コロナウイルスに人々は苦しめられています。目に見えないものとの戦いは本当に難しく大変です。しかし、戦争は目に見えないものが引き起こすものではありません。

1945年の終戦の日から75年。平和主義を掲げた日本国憲法のもと、「戦後」が続いています。これからも、「戦後」がずっと続くために、平和主義の理念を忘れず、決して戦争をしない、平和を守り、築いていくという決意を新たにして、慰霊の言葉にさせていただきます。

令和2年8月15日　鹿児島市立甲東中学校2年　大保　詩織